縄文文化の人類史的価値とは？ ◎菊池徹夫

青森は縄文遺跡の宝庫、ことに三内丸山遺跡は秋田の大湯環状列石と並んで国の特別史跡、いわば遺跡の国宝だ。もちろん、亀ヶ岡石器時代遺跡や是川石器時代遺跡は古くから全国に知られた著名な遺跡だし、小牧野遺跡や大森勝山遺跡のストーン・サークルは他に例を見ない。そこで、日本の縄文文化を代表する遺跡、日本を代表する文化遺産として、これら青森、秋田、岩手および北海道の代表的な縄文遺跡を選りすぐって世界遺産に推薦しよう、ということになった。

しかし、いかに日本国内で大事であろうと、いかに日本人が素晴らしいと叫んだところで、それだけで世界遺産として国の推薦を受け、さらにユネスコの登録が叶うわけではない。そのためには、より広く世界に通用する「普遍的な価値」や「人類史的意義」を認めてもらわなければならない。

では、縄文文化の「顕著で普遍的な価値」とは何だろう。世界に例を見ないほど優れた土器文化や、土偶などにうかがえる高い精神文化もさることながら、私は次の3つを考えている。第1は、それが西方の新石器文化のように本格的農耕・牧畜ではなく狩猟・採集・漁労と落葉広葉樹林での植物管理・初期的栽培によりつつ、じつに1万年にわたる長期間、定住集落を形成・維持した稀有の例であること。第2に、縄文社会が、世界にも稀な生物多様性に富む日本列島の自然と共生し、変動する環境に適応しつつ持続されたこと。そして第3に、縄文人は戦争を行わなかったこと、である。

これらは、現代に生き未来に向かう人類に、じつに貴重なヒントを与えてくれる。さらにもう一つ、縄文文化こそは、弥生文化以降の日本人と日本文化の基層・基盤をなす、まさに「母なる文化」だ、ということ。

東アジアの日本列島で展開された、じつにユニークなこの先史文化は、世界史全体に新たなモデルを提供し、真に普遍的な人類史を再構築するうえで不可欠なものとなることを疑わない。

きくち てつお　縄文遺跡群世界遺産登録推進専門家委員会委員長

1939年函館市生まれ。早稲田大学文学部・東京大学文学部卒業。東京大学大学院人文科学研究科修士課程（考古学）修了。現在、早稲田大学名誉教授、まほろん（福島県文化財センター白河館）館長。著書『はじめての考古学』（朝日学生新聞社、2013）など多数。